

## 大分県のシイタケ栽培の史的考察

大分県きのこ研究指導センター 桑野 功・高倉 芳樹

## 1. はじめに

シイタケは、古くから山村経済の重要な産物として栽培されてきたが、その栽培は各時代で大きな特徴がある。そこで、大分県のシイタケ栽培の変遷を明らかにするため、人為的栽培（人工栽培）の特徴により時代を区分した。

## 2. 調査

調査は、県内各時代のシイタケ栽培に関する文献と気候の変動、乾シイタケの生産量等の資料を蒐集し、年次別に特徴を明らかにした。

## (1) 文献に見られる主な栽培技術の特徴

① 「大野郡椎茸栽培法<sup>1)</sup>」

1890年（明23）のもので、明治中期の栽培方法が記されており、今回初めて内容を要約したものである。栽培方法は、鉈目栽培である。

伏せ込みの適地は南向きの暖かいところで、乾燥気味のところがよく、シデだけは北向きのところがよい。

伏せ込みの高さは、地面からおよそ8寸の高さに受け木を作り、それに並び重ねて置く。

② 「山の光“椎茸栽培”<sup>2)</sup>」

1930年（昭5）のもので、人工栽培の祖を源兵衛としている。

栽培方法は、鉈目栽培である。

伏せ込みの適地は、原木伐採地の範囲内、または伐採地より60間以内の地。以前に棚掛けした場所、深谷部や山頂部は避ける。

伏せ込みの高さは、枕木の下方面までの高さをおよそ1尺5寸以下には絶対しないこと。

③ 「椎茸栽培書<sup>3)</sup>」

1936年（昭11）のもので、鉈目栽培を主体に、孢子蒔付法、埋槽法、柵木挿入法が記されている。

伏せ込みの適地は、山の凸地、松の疎林、アセビの成育しているところである。

伏せ込みの高さは、クヌギ・ナラは南向き1尺7寸から2尺5寸、北向き2尺2寸から3尺、平地は、1割増しとする。シデ類は、クヌギ・ナラより1から2割低くする。シイ・カシ類は、更に1から2割低くする。

④ 「合理的椎茸の栽培法<sup>4)</sup>」

1951年（昭26）のもので、種菌接種栽培である。

伏せ込みの適地は、山の中腹以下の傾斜地で馬の背のようなところの南面か東南面の乾燥地で通風のよいところである。

伏せ込みの高さは、クヌギ・ナラは南向きの傾斜地で中腹以下の低地で2尺2~3寸、南向きの峰近くで1尺5~6寸、北向きの低地で3尺内外、北向きの峰では2尺ぐらい、平地は傾斜地より1割高くする。シデは、クヌギ・ナラより1~2割低くする。シイ・カシは、更に1~2割低くする。

⑤ 「椎茸栽培の技術指針<sup>5)</sup>」

1979年（昭54）のもので、現在も指針としている。

伏せ込みの適地は、南または南東向きのところで、凸地で周囲が開けているところ。降雨時の排水がよく、また降雨後は短時間で表面が乾くところで、通風のよい、山腹か尾根筋で霧の停滞しないところである。

伏せ込みの高さは、乾きすぎるところは低めに、湿度の高いところは高めに伏せ込む。

## (2) 大分県の気候変動

「大分県の気候変動<sup>6)</sup>」では、1725年（享保10）から1968年（昭43）の240年間の気候が調査されている。梅雨期の降雨日数は図-1<sup>7)</sup>のとおりで、1810年ごろから資料の欠けている期間をはさみ1900年ごろまでの間は、梅雨期の降雨日数の少ない期間である。

(3) 大分県の乾シイタケ生産量の推移<sup>8)</sup>

大分県の乾シイタケ年間生産量の10年移動平均値は図-2のとおりで、1950年ごろから急増している。

### 3. 考 察

鉈目栽培が始められた1670年ごろ<sup>9)</sup>から伏せ込み技術が確立するまでの間は、鉈目を入れた原木は放置されていたと考える。伏せ込みが実施されだした時期は梅雨期の降雨日数が少ない時期であったため、低い高さの伏せ込みであり、1910年ごろまで実施された。その後、梅雨期の降雨日数が増加するとともに伏せ込みの

高さを1尺5寸以上と高くし、通風をよくし、ほだ化技術の改善が図られた。つぎに1946年ごろから純粹培養種菌の普及が進められ、チェーンソーや穿孔機の導入と種菌接種量の増加とともに乾シイタケ生産量が増加した。

これを鉈目栽培の祖を源兵衛説<sup>9)</sup>として年代別に区分すると次のようになる。

鉈目栽培時代 第1期 1670年ごろ ～ 未確認

原木に鉈目を入れ伏せ込みをしない。

鉈目栽培時代 第2期 未確認～1910年ごろ

原木に鉈目を入れ低い伏せ込みとする。

鉈目栽培時代 第3期 1910年ごろ～1945年ごろ

原木に鉈目を入れ高い伏せ込みとする。

種菌接種時代 第1期 1946年ごろ～1960年ごろ

純粹培養種菌の普及を図る。

種菌接種時代 第2期 1960年ごろ～現在

伐木、種菌接種用の機材を導入しシイタケの量産を図る。

シイタケの原木栽培では、伏せ込み作業は古くから重要な作業と言われ、現在でもほだ付を大きく左右する作業である。その伏せ込みの原型が鉈目栽培時代第2期1910年ごろまでに出現したと言える。

### 引用文献

- (1) 大分県内務部第二課：勸業報告, 36, 4～5
- (2) 大分県林業振興課：椎茸栽培の技術指針, 15～16, 1979
- (3) ————：特用林産関係資料, 1983
- (4) ————：特用林産物生産の現状と振興策, 1992
- (5) 小野村雄著：山の光“椎茸栽培”, 10, 79～82, 1930
- (6) 甲斐寿男：大分の林業, 7, 7～7～13, 8, 21～26, 9, 7～11, 1951
- (7) 齊藤将一・服部徳一：日本気象学会機関誌, 天気 7, 29～36, 1970
- (8) 日本気象協会大分支部：大分県気象月報, 1970～1992
- (9) 矢野富香著：椎茸栽培書, 40～43

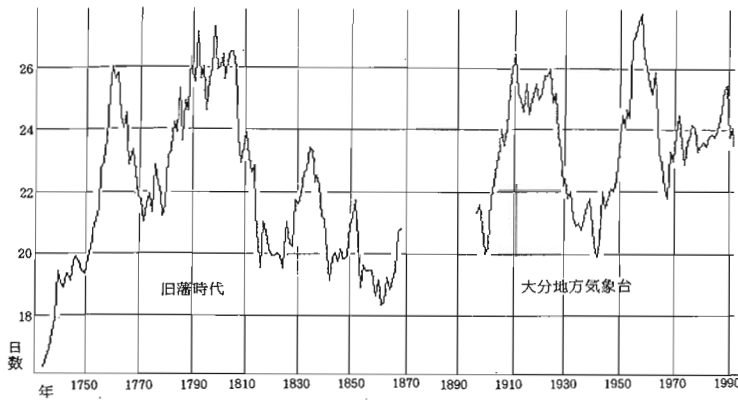


図-1 大分県内の梅雨期降水日数(6, 7月)(10年移動平均)

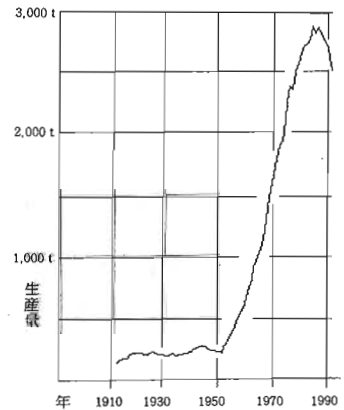


図-2 大分県乾シイタケ生産量(10年移動平均)